

Leo Marx 再考

——アメリカ神話と文学批評——

磯崎 恵子

文学における神話批評は今世紀初頭から現在に至るまで、常に批評家達を魅了し続けてきた批評理論である。Joseph Campbell あるいは Northrop Frye, さらには Roland Barthes まで、神話批評は文学批評の領域にとどまらず、広く社会のシステムを研究するうえで有効な理論となってきた。しかし、アメリカ合衆国における文学批評の歴史の中では、1940年代後半から60年代半ばにかけて神話批評は特異な展開を遂げる。いわゆる American Studies と呼ばれる学派の myth-symbol school の台頭である⁽¹⁾。1950年、Henry Nash Smith による *Virgin Land* を皮切りに、この一群に属する批評家たち（例えば R. W. B. Lewis, Richard Chase, Leslie Fiedler, John William Ward, Alan Trachtenberg そして Leo Marx 等）は、次々と作品を発表してゆく。彼等は先行する New Criticism に対抗する形で現れてきたとあってよい。個々の文学作品をそれぞれ閉じられた、自己充足的世界と捉え、その中での整合性を追求してゆく New Criticism の方法に対し、彼等 American Studies の批評家達は、文学を文化というより広いシステムの一形態と捉え、相互の関連を研究することにより、文学を通じ文化そのものの解釈を目指す。そしてこの際、文化解釈の鍵となったのは神話、アメリカ文化のシンボルを示すアメリカ神話である。すなわち、Smith は自営農民の神話を、Lewis は American Adam の神話を、Ward は Andrew Jackson にまつわる self-made man の神話を取り上げるのである。そして、これらアメリカ神話批評の一群の最期の輝きともいえる Leo Marx は、アメリカにおける pastoralism の神話という側面か

らアメリカ文化を解説しようとする。本稿は Leo Marx の批評の方法を明らかにしつつ、それが孕む問題点を挙げ、文学批評におけるアメリカ神話を考察していきたい。

* * *

Leo Marx がその出世作 *The Machine in the Garden* を発表したのは1964年である。おそらく、これが彼の最初にして最後の重要な作品ということになろう。その冒頭において Marx は、本書の主題は「アメリカ人の人生観の変遷を描くこと⁽⁴⁾」にあるとする。このアメリカの経験を解釈するに際し、彼が用いるのは、古典文学の一手法である pastoralism である。しかし Marx は、これは「文学についての書物ではない」(p. 4) という。pastoralism という側面からアメリカの経験を跡付ける題材は、何も文学作品だけに限らない。先の言葉に続き Marx はこう述べる。

むしろ、[本書は]、文学、一般的な諸理念、集団的想像力のいくつかの産物——この最後のものは「文化的象徴」と呼ぶことができよう——の出会う文化的領域についてのものである。アメリカの諸寓話の意味と影響力を正しく評価するためには、文学的想像力と、文学の外で——つまり一般的に文化といわれるところで——起こる事件との相互作用を理解することが必要である。私の主な関心は、したがって、理想の田園がわれわれの今日の状況を明らかにするであろう意味および価値を分析するための一手段である、有効な「矛盾の隠喩」の一部になるにいたった過程を示すことである。(p. 3)

ここで宣言されているのは、等しく American Studies の批評家たちが採った方法論である。すなわち、American Studies の目的とは、「アメリカの文化を過去と現在を通じ、全体として研究する」“the investigation of American culture, past and present, as a whole⁽⁵⁾” ことにある。ここには文化という総体に対する、共時的及び通時的の試みが見られる。文学 (literary analysis) と文学外=文化 (cultural history) を統合し、そこに現在に通じるなんらかの有効な法則 (usable past) を見出そうとする、全体論 Holism と呼ばれる方法

論である⁽⁴⁾。

Holism はその分析対象を myth あるいは symbol とする。そして Marx の対象は, pastoral ideal すなわち理想の田園という神話, 特にアメリカ産業革命期におけるその神話の変容である。「調和と喜悦のオアシスに隠棲したい」(p. 3) という pastoralism の夢が, 19世紀後半のアメリカにおいてどのような「^{ヴァリエーション}変形」をこうむるのか。Marx は問う。「素朴で田園的な環境を理想化する衝動は, 複雑にこみいった, 都会的, 産業的, 核武装された社会に住む人間の営む生活と, いったいどのようななかかわりあいがあるのだろうか」(p. 5) と。彼はまず, この「中心的課題」に対し, pastoralism を二つに区別することから始める。それら二つは共通して, 「より素朴なより調和のある人生や、『より自然に近い』生活を求める気持ちが表されている」(p. 6) が, 一つは感傷的な田園主義 sentimental pastoralism の形をとり, 文明社会からの現実逃避としての自然への衝動, かつての農村の風景へのノスタルジア, 或いは無政府的な原始主義等となって顕れる。そしてこの sentimental pastoralism は, Marx によると, 想像的表現の領域では, 特に「アメリカ人の集団的幻想のより低い次元」(p. 6)において著しい。すなわち, 西部劇, ノスタルジックな絵画, 広告, 或いは「大衆向けの文学作品」等の中に表現されている。しかし, この同じ牧歌的なものへの衝動の主題が, より「高度な」文学作品で扱われると, 結果として, sentimental pastoralism と全く違った点に到達すると Marx は言う。彼はそれを複雑な田園主義 complex pastoralism と呼び, その典型的なパターンを Nathaniel Hawthorne の *The American Notebooks* (1932) の中の一エピソードに見る。

後になってまとめられた, これら日記風の散文の中から Marx が取り上げたエピソードとは, 1844年7月27日 Sleepy Hollow と呼ばれる森の窪地で Hawthorne が経験した「小さな出来事」である。前半部分には, 森の自然の妙なる描写と, そこを散歩する文学者の悠然とした, ほとんど至福とも言える調和の念が描かれている。しかしその夢想は突然の闖入者——汽車の汽笛——に破られ, 静かで平和な世界に混乱と喧騒が侵入する。やがて汽笛が遠ざかり

再び静寂が戻っても、前の静けさと比べ何かが決定的に違ってしまったことに文学者は気付くのである。つまり Hawthorne は突然の汽笛の音により、牧歌的な夢想と相容れない「現実の存在」を認めざるをえなかったのである。「俗世間を逃れることの喜び——素朴な空想の喜び——への一般的な礼賛で始まったものが、機械という要素が入りこむことにより、はるかに複雑な精神状態へ転化」(p. 15)されたのである。これが *complex pastoralism* と呼ばれるものである。この、「風景の中への機械の突然の出現」或いは「破壊された田園の静けさ」という「メタフォリックな構想」は、1840年以降アメリカ文学作品の中に繰り返し現れる。Marx はこう断言する。「実際、アメリカ文学の主要な作品の中で、風景の中に機械が突然出現するというイメージが十分に働いていないものを見出すことのほうが困難なくらいである。」(p. 16)

しかし、この *Sleepy Hollow* の主題は、1840年代産業革命期のアメリカというコンテクストにもかかわらず、常套に則った古典時代の文学的手法の現代における変形の一つであると Marx は述べ、Virgil の *Eclogues* 用い、彼の *complex pastoralism* を田園詩の形式という伝統の中に位置付ける。

田園詩における理想の田園世界は二つの境界線に接している。一方は荒野とも言うべき手付かずの自然であり、もう一方は高度に発達した文明を持つ都市である。つまり、この理想の世界は自然と人工(技術)という対立した二つの世界の調和により成り立っている。原始的な荒野の自然の敵意からも、組織化された都市の腐敗からも隔たっている緑の谷の理想郷。それは、相対立する二つの力である自然と文明の「中間」に位置する、Marx 言うところの「中間的風景」*middle landscape* である。しかし、この中間的風景は静止した、永遠の理想郷ではいられず、絶えず二つの世界からの侵入に脅かされている。そして田園詩の構想とは、この理想郷を「変化の圧力にさらすこと、つまり田園をとりまく複雑で強力な世界、一言でいえば歴史にさらすこと」(p. 24)にあるのである。理想の世界に対し、現実を、歴史を突付ける力を Marx は「反発力」*counterforce* と呼び、それは Virgil の田園詩の中では土地を追われた羊飼いの苦境であり、そして、19世紀後半のアメリカ文学においては、機械技術のイ

メージに象徴される「産業化」によって提示されるのである。

しかし、1844年の *Sleepy Hollow* のエピソードは伝統的な文学的手法に則りながらも、そこには従来と異なった決定的な状況が示されている。田園詩の形式によれば、都市と田園の占める位置は固定しており、たとえ都市的な力が田園に侵入しそれを荒廃させたとしても、その力の影響が後退した後では田園生活の性格は本質的に以前と変わる事がなかった。しかし、1844年コンコードの森に響き渡った汽笛は産業革命、技術の革新、圧倒的な変化の力の象徴であり、その力は後退することなく、田園世界を完全に支配しようとしていた。「いまや偉大な外界が田園世界に侵入し始めた」(p. 31-2) のである。1844年の田園詩は今までにない劇的な反発力を手にしていた。

ここで当然起こり得る反論は、産業革命はひとりアメリカのみに発生したものでなく、「田園に侵入する機械」というメタファーを極めてアメリカ的とする根拠は何処にあるのか、というものであろう⁹⁾。この反論にはこう答えることができよう。つまり、新大陸の発見以来アメリカは、自然と人工と抗争という田園詩の伝統を身を以て生きてきたのであるから、と。今まで文学の上でのみの幻想と考えられていた田園の理想が、現実の場所として、神話と現実の融合として、アメリカ大陸に出現したのである。

新大陸を舞台とした田園詩、すなわち、一方にヨーロッパの腐敗した都市、一方に新大陸の未開の荒野を持つ「中間的風景」としての理想の田園アメリカという物語の最初のものとして、新大陸への植民が始まった頃書かれた Shakespeare の *The Tempest* (1611) を Marx は取り上げる。そして、この作品には、典型的なアメリカ文学作品群の中に繰り返し現れるテーマが先取りされていると彼は論じる。そのテーマとは、自然への救いを求めた旅、そこでの精神的再生、そして都市への帰還である。*Tempest* の結末は、新大陸のうえに描かれた、自然と人工の調和である「中間的風景」が、希望にしか過ぎないということを我々に教える。物語の一行は最後に、調和の島を出て、喧騒と煩雑さの待つヨーロッパへと帰っていく。

しかし、時代が下るにつれ、「理想の島」「田園の隠棲所」という新世界を

舞台にした文学の形式は、単なる文学上の一手法という様式を離れ、アメリカの現実の社会、或いはアメリカ人の精神世界へと根を下ろしていく。18世紀に入り、この伝統的な文学の常套は、アメリカ人にとっての現実、すなわち、その起源にまつわるアメリカ神話として発展していくのである。

18世紀アメリカにおいて、pastoral ideal が如何にしてアメリカ神話となっていたか、Marx は第三章 The Garden で論じている。この章では、まず、アメリカ人による最初の書物とされる、植民地時代初期の作家 Robert Beverley による *History and Present State of Virginia* (1705) が取り上げられ、その中の、Garden をめぐる二つの異なったイメージ——「未開で素朴な、アダムとイヴの楽園追放以前のエデン」と「古典的なヴァージル風の牧場に象徴される諸価値を包含する、よく耕作された庭園」——が明らかにされる。そして、Garden をめぐるこのアンビヴァレントな感情——矛盾——を、Beverley がその結末において如何に未解決のまま放置したかが語られ、この問題は Thomas Jefferson の *Notes on Virginia* (1785) に引き継がれる。この本の中で Jefferson は、原始主義的空想を退け、中間的風景としての農民の楽園という田園主義の理想を打ち建てる。更に、当時既にヨーロッパの経済を変えつつあった産業革命の力を、田園的アメリカは如何に防ぐことができるか、中間的風景から成る素朴な社会を保持するため、政府はどのような政策を選択すべきか、を彼は論じている。この本は、原始主義と過剰な文明という両極端を調和させた「中間的風景」の理念を述べたものであるが、また、その理念と刻々変化する外的状況——つまるところ神話と歴史——をもどうにかして調和させようとした努力の産物である。そしてその努力は、19世紀に入り、産業化の波がヨーロッパから押し寄せるにつれ、ますます絶望的なものとなっていくのである。

この章において Marx は、冒頭で宣言した通り、文化的領域の題材を取り上げている。「芸術性という点で欠けている (p. 75)」(*The History and Present State of Virginia*)、或いは「偉大な作品とはいえない (p. 118)」(*Notes on Virginia*)、文学外の題材のなかに、神話と歴史という矛盾の「弁証

法的」解決方法を探るのである。彼のこの態度は次の第四章 *The Machine* へと続く。

Garden 同様, *Machine* に関しても, それをめぐる二つの相反するイメージが挙げられよう⁴⁾。一つは, 人間の精神を解放する, 進歩の象徴としての機械。そしてもう一つは, 人間性を抑圧する, 墮落した文明の象徴としての機械。前者は田園の神話と調和し, 後者はそれを破壊する。Marx は, Tench Coxe の講演, Timothy Walker のエッセイ “Defence of Mechanical Philosophy” (1829), 或いは Daniel Webster の演説等で前者を論じ, 後者を Thomas Carlyle の “Signs of the Times” (1829), 或いは John Orvis の新聞記事の中に見る。しかし, 機械を推進するにしても拒否するにしても, これら双方はその論拠を田園主義に置いていることに変わりなく, 彼等は工業技術の進歩と緑の楽園或いは緑の共和国との間にある根本的な矛盾に気付くことはなかった。そして時が経つにつれ, 外界の変化が否応もなく彼等の論を追い越し, 田園主義の理念は漠然とした願望のレトリックとなっていく。全ては, 感傷的な田園主義へと墮していく。そして, この章の最後に Marx は言う。「この矛盾に内在する意味を発見するのは, アメリカの本格的な作家たちに残された課題となったのである。」(p. 226)

遂に, 「本格的な」作家たちの作品が論じられる。第五章 *Two Kingdoms of Force* において, 文学作品の中に繰り返し現れる「楽園に侵入する機械」という「矛盾のメタファー」による神話と歴史との間の解決の方法を論じるにあたり, Marx は, そのメタファーの用いられ方には三つの型があると述べる。彼はそれらを, 超越的, 悲劇的, 地方的と名付ける。そしてこれらには, 「ロマンティックな田園主義の, 複雑ではっきりとアメリカ的な形態がある」(p. 229) とする。それぞれの型は, Ralph Waldo Emerson の *Nature* (1836) と Henry David Thoreau の *Walden* (1854), Nathaniel Hawthorne の “Ethan Brand” (1850) と Herman Melville の *Typee* (1846), *Moby-Dick* (1851), そして Mark Twain の *The Adventures of Huckleberry Finn* (1884) を用いて論じられる。他に Marx は, Frank Norris の *The Octopus* (1901),

Henry Adams の *The Education of Henry Adams* (私版, 1907), そして第六章で F. Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* (1925) を論じている。各々の作品の分析の正否についてはここでは述べないが、それぞれに共通して Marx が述べているのは、矛盾は提示されるが根本的な解決は決して為されていないということである。例えば *Walden* の結末については、

結局において、ソーローは田園的希望をその伝統的な位置に再興する。彼はそれを、実現できないことがはっきりした歴史の中から取り去って、文学の中に、いわば彼の意識の中に、彼の技巧の中に、『ウォールデン』の中に、おき直すのである。(p. 265)

と述べる。或いは、*Moby-Dick* について、

イシュメイルの「救済」を完成させることによって、メルヴィルはイシュメイルの人生観、すなわち田園の理想はその反対のものと離れがたく括りつけられるという複雑な田園主義に祝福を与えた。それは経験の「絶体絶命の中心」において生じる原則である。同時にメルヴィルは、この象徴を創る人の真理が政治的に無力であることを認める。確かにイシュメイルは生き残る。しかしそれは、社会が沈没するときにその情景の端のところで無力にも浮かんでいる「孤児」としてであった。(p. 318)

と結論付ける。これらの解決法はあくまで文学作品の「実質的な解決」“a virtual resolution (p. 31)” であるに過ぎない。彼等は「力の二つの王国」に引き裂かれたままである。

Marx は先達である Lionel Trilling と Richard Chase を引き合いに出し、彼等が提唱した弁証法的文化論を支持する。つまり、「一つの文化の『本質』は中心部における闘争もしくは矛盾に存在し、偉大な芸術家とは、自らのなかにその弁証法の大部分を包含する人々である」(p. 342) と。そして Marx においてはこの「矛盾のメタファー」とは、楽園に侵入する機械であった。田園的理想と機械、神話と現実の間の闘争もしくは矛盾。しかしこの矛盾は、Marx によると、アメリカの「偉大な」作家たちによって解決される事が決していない。彼等は常に、そして今後も失敗し続ける。この二つの力の間で引き裂かれ続けること、それが彼等の complex pastoralism である。彼等の価値はこの

失敗の上にも、それにより我々に現在置かれている状況を明らかにしてくれることの上にもある、と Marx はいう。そして、最後にこう述べてこの本を締め括る。

われわれの置かれている状況を変革するためには、可能性の新しいシンボルが必要である。このようなシンボルの創造はある程度まで芸術家の責任であるが、より大きな観点から見れば、社会全体の責任でもある。というのも機械の楽園への突然の侵入が提起する問題が、究極的には芸術ではなく政治にかかわる問題だからである。

(p. 365)

最後まで Marx の論旨を追ってきて、我々は奇妙な肩透かしの念を禁じ得ない。それでは、彼がこれまで数々の文学作品を通じて論じてきたことはなんだったのか。彼は冒頭で文学と文学外の相互作用を論じることが目的といった。では、彼の言う文学外即ち文化に政治は含まれていないのか。いや、そもそも文学とは極めて政治的な産物ではないのか。彼の冒頭の決意にもかかわらず、論が進むにつれ彼の意図とは反対に、文学と社会或いは文化の総体、そして文学批評と政治との間がますます乖離していく。彼の描きたかった usable past はこのようなものでなかったはずである。彼は失敗したのか。もしそうならその失敗の原因は何なのか。

Machor はその論文のなかで R. W. B. Lewis と Marx を同時に論じながら実に興味深いことを述べている。つまり彼等の題材に対する態度がまま、自らの批評に対する態度になっているというものである⁽⁹⁾。彼等は Trilling の弁証法的文化論を踏まえ、文学者たちに内在する Garden (神話) と Machine (歴史) との矛盾の解決法をその作品に探るのだが、それは文学と文化という二つの領域の統合を自らの批評で果たそうとする Marx 等自身の態度に似ている。そして多くの作家たちは、Marx によれば、理想の田園神話に心惹かれながらも、歴史の進行を止めることはできないという認識に苛まれながら、その田園物語の不完全な結末に至るのである。これら作家たちに示した Marx の共感、まさに彼自身が同じ立場に立っていたからに違いない。Marx 自身も

感傷的な田園主義に強く惹かれていたのである。このことは、彼の Jefferson を扱う態度として現れているように思われる。

The Machine in the Garden 全体を通じて、Jefferson 程詳細にまた同情的に扱われた人物はいない。ここでは彼は単なる政治家ではなく、詩人であると同時に経済学者、隠棲者にして有能な施政者である。Jefferson の思想や行動のなかに一貫した道理を押しつけることをしてはならないと Marx は主張する。

結局、彼の田園的理想への強い傾向や、それを否定する冷静な、分析的な、実践的な調子の、一方を無視し他方を強調するということではできないのである。彼の発言や行動のすべてに、このような分裂化の傾向がある。(p. 135)

Jeffersonこそ、理想の田園という観念に、自営農民の共和国という具体的なイメージを付与しそれを神話にまで高めた、そして彼自身がアメリカ人にとっての神話にまでなった人物である。だが、彼の「一貫性の欠如」は、「根本的なあいまいさから、つまり自己と社会の相対立する要求への複雑な反応からくる」(p. 136)と Marx は述べる。Jefferson もまた、complex pastoralism を生きていたのである。彼は感傷的な懐古主義者ではなく、歴史を認識している。彼の思考もまた、「弁証法的」である。つまり、彼の「中間的風景」の理念を、「常に変化する外的状況に適応させ」(p. 139)ようとするのである。そして、Marx はこう結論付ける。

田園詩の形式を用いて作品を書いた幾人かの偉大な詩人たちと同じく、ジェファソンの非凡さは、夢の存在に反応を示しながらも、最後にはそれから離れることができた点にあった。(p. 143-4)

Marx は、田園の神話に惹かれることからくる自らの曖昧な立場に気付いていたに違いない。しかし、彼は Jefferson に習い、感傷的な田園主義に陥ることのない批評姿勢を保持しようとした。そしてそれは、かなり成功していたと思われる。しかし、問題は、彼の態度にあるのではなく、もっと根本的な方法

論の次元に属するのである。

1940年代後半から60年代半ばに一世を風靡した American Studies の myth-symbol 学派は全体論的アプローチをその批評方法としている。「アメリカ文化を、過去と現在を通じて、全体として研究する。その際、アメリカ神話を用いる。」ここで問題となるのは、アメリカ神話である。

彼等の神話の使い方については、数々の批判が向けられている。すなわち、彼等が用いる神話と、実際の社会、制度の関係性が追求されていない、もし関係付けられていたとしても、それらの関連を明確にする理論がない。「要するに、これら symbol-myth-image 研究の大半においては、複数のシンボルがどのようにこの世のなかで実際に作用し合うのか、はっきりとは解らない。」と、Gene Wise は述べている⁶⁾。また、Cecil F. Tate は、構造主義の立場から、American Studies は言語学や文化人類学の理論から学ぶことがあるはずだと提言する⁶⁾。しかし、当の American Studies の批評家たちは、自らの方法論に無自覚で、その理論の欠如を誇ってさえいる。“American Studies—A Defense of an Unscientific Method” (1969) の中で Marx は、1957年の Henry Nash Smith の論文 “Can ‘American Studies’ Develop a Method?” を引き合いに出し、American Studies には、はっきりとした理論的な方法はない（ここには、自分たちは「芸術」を扱う人文学系であるから、科学的である必要はないという態度が見え隠れする）、としている⁶⁾。しかし、いくら彼等が無自覚であったとしても、アメリカ神話を用いた全体論的な方法は歴然としている。そして、彼等の批評は必然的に、アメリカ文化における、アメリカ性 Americaness を強調することとなる。これは非常に危険な綱渡りであるといえる。彼等は Trilling の弁証法的文化論を継承することは先に述べた。Trilling は先行する V. L. Parrington の文化＝潮流説に対抗し、「一つの文化は流れでもなければ、また合流ですらない。その存在の形態は闘争であり、少なくともも討論である——それは弁証法でないならば、何物でもない。」“A culture is not a flow, nor even a confluence; the form of its existence is struggle, or at least debate it is nothing if not a dialectic. (p. 342)” と論じる。

American Studies の批評家たちはこれを応用し、アメリカ文化を、アメリカ神話対歴史（これはアメリカ対ヨーロッパと言い換えられる）の間の葛藤と見做す。弁証法のダイナミズムに文化を解き放ったと見えて、その実、アメリカ神話を対象としたことにより、彼等はアメリカ文化を非常に限定してしまったのである。アメリカ神話によりアメリカ文化を再構成する、という彼等の態度には、現在から見て有効な文化史という視点が隠されている。つまり、現状を肯定する「有効な過去」。これは彼等の批評そのものが、Americanness を喧伝する、critical nationalism ともいうべきものになってしまう危険性を孕んでいる⁶⁹。更に彼等は、文学理論と文化史を「弁証法的」に統合することを目的としていた。ここに、もう一つ重要な問題が付随する。言うまでもなく、正典 canon の問題である。

The Machine in the Garden において Marx が論じたのは全て白人男性の作家ばかりである、という批判は今まで数多くなされてきた。実際、Marx を批判する際、一番攻撃しやすいのはこの点であろう。次に言われるのが、彼が余りにも単純明快に、複雑な田園主義を「高度な」文学に、感傷的な田園主義を「低次の」文学或いは文化に当てている点である。先に挙げた論文のなかで、canon が「蓄積された英知」「the collective wisdom” に基づくものとした上で、Marx はこう続ける。「この正典は、文学的意識の最高の展開を体現しているとされるから、人文学者の絶えず有効な過去を再生しようとする試みにおいて、重要な資料となる。」“Because this canon supposedly embodies the highest development of literary consciousness, it is a major source for the humanist in his continuing effort to recover the usable past.”⁶⁹ 更に、文学と文化の統合を、神話と歴史の「弁証法」に重ね合わせれば、Marx はまた、限りなく「文学という神話」に引き付けられる。アメリカ神話によってアメリカ文化を再構成しようとする、どうしても正典としての文学の優位性が導きだされ、結果、文学と文学外（文化）はますます離れてしまう。Marx の失敗は、最初、方法論を設定した時点で運命付けられていた。

* * *

しかしながら、文学を文化の一形態と捉え、文学を通じて文化のシステムを解明しようとした Marx の最初の意気込みは決して間違っていない。Russell Reising も認めているが⁽¹⁾、Marx は果たせなかったものの、文学と歴史そして政治を結び付けようと試みた。そして、最後で彼がアメリカ神話の中の政治性を語ったとき、多くの後に続く批評家たちに道を示したといつてよい。文学の政治性、或いは文学というシステムそのものを解明しようとする動きが最近目立って見受けられる。例えば、新歴史主義 New Historicism と canon の大幅な書き替えがそれである。文学を文学たらしめている、或いは canon を canon たらしめている価値と制度を明らかにしつつ、論じている批評家自身もなんらかの価値に支配されていることを認め、自らの立場を相対化する。そうすることによって、自らの批評が現在を肯定する usable past に為ることを防いでいる。批評とは、ある意味で、「永遠の過渡期」である。先行する批評を打ち消し、或いは再評価し、飽くことなく続けられていく。しかし、その中であって、現在は近年にない混沌といつてよいだろう。この混沌から、果たして何か生まれるのか、生まれないまま終わるのか、別のさらなる混沌へと発展するのか、目が離せない。

註

- (1) Vincent B. Leitch, *American Literary Criticism from the Thirties to the Eighties* (New York: Columbia University Press, 1988), p. 131.
- (2) Leo Marx, *The Machine in the Garden* (London: Oxford University Press, 1964), p. 3. 以下引用は該当頁数のみで示す。また、訳は榊原朕夫・明石紀雄両氏のものによるが、前後の関係で変更した箇所がある。
- (3) Henry Nash Smith, "Can 'American Studies' Develop a Method?," *American Quarterly* (Summer, 1957) 引用は、Leo Marx, "American Studies—A Defense of an Unscientific Method," *New Literary History* (Fall, 1969), p. 77 より。
- (4) James L. Machor, "Tradition, Holism, and the Dilemmas of American Literary Studies," *Texas Studies in Literature and Language* (Spring, 1980), p. 100.

- (5) 例えば, Nicolaus C. Mills, "The Machine in the Anglo-American Garden," *Centennial Review* (Spring, 1970), pp. 201-212.
- (6) 機械をめぐるイメージの変遷は, John F. Kasson, *Civilizing the Machine: Technology and Republican Values in America, 1776-1900* (New York: Penguin Books, 1976) に詳しい。
- (7) Machor, p. 116.
- (8) Gene Wise, *American Historical Explanations* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1980), p. 315.
- (9) Cecil F. Tate, *The Search for a Method in American Studies* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1973).
- (10) Marx, "American Studies," pp. 75-6.
- (11) しかしながら, この後 Marx は "myth" という用語の使用に対し, 慎重な態度を見せ始める。最近の論文の中で Marx は, 同じく pastoralism の視点から, 1970年代までをも含む「アメリカ文化史」と「アメリカ古典文学」を論じているが, ここでは "myth" という用語はほとんど用いられず, 代わりに Clifford Geertz から援用した "ideology" が多く使用されている。Leo Marx, "Pastoralism in America," *Ideology and Classic American Literature*, ed. Sacvan Bercovitch & Myra Jehlen (New York: Cambridge University Press, 1986), pp. 36-69.
- (12) Marx, "American Studies," p. 80.
- (13) Russell Reising, *The Unusable Past: Theory & the Study of American Literature* (New York: Methuen), pp. 140-51.